

イネいもち病の防除について

令和2年7月17日
加須農林振興センター

管内の広範囲で葉いもちの増加が予想されます

今後のいもち病の発生に注意し、適期防除に努めて下さい

【現在の発生状況】

埼玉県病害虫防除所では、いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況を調査しています。

その結果、県内の5月1日から7月15日までのいもち病（葉いもち）感染好適日の日数は73日です。過去10年の平年値は39.4日でした。

初期の病徴を見逃さないようにし、適切に防除を実施するようにしましょう。

【発生条件】

- ①いもち病菌は、温度が20～25℃の日が続き、湿度が高くなると感染します。
- ②曇雨天の日が続き、日照が少なく植物体の濡れ時間が長くなると発生が拡大します。
- ③窒素肥料の多用等によってイネが軟弱になると抵抗力が弱められ感染し易くなります。



写真：葉いもち症状

【防除上注意すべきポイント】

- ①置苗は、いもち病の発生源になるため水田及びその周辺に放置しない。
- ②ほ場の観察をして葉いもちの初発の確認に努め、発生初期に防除する。
- ③いもち病菌がイネの穂に侵入しやすいのは、出穂直後から出穂後14日ぐらいまでです。この間に降雨が続く場合は、穂いもちの発生に注意が必要です。
- ④粒剤で防除する場合は、効果が表れるまで時間がかかるため使用時期に注意するとともに、散布後少なくとも3～4日間は湛水状態(水深3～5cm)を保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしないこと。

表 使用農薬（例）

薬剤名	使用量 希釈倍率	使用時期	使用回数	使用方法
ブラシフロアブル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	散布
カスミン液剤	1,000倍	穂揃期まで	2回以内	散布
キタジンP粒剤	3～5kg/10a	葉いもちに対しては初発7日前～初発時、穂いもちに対しては出穂7～20日前	2回以内	散布
フジワン粒剤	3～5kg/10a	葉いもちに対しては初発7～10日前、穂いもちに対しては出穂10～30日前	2回以内	湛水散布

○農薬使用の際は、ラベル表示(使用基準)を必ず確認してから使用しましょう。○農薬の飛散防止に努めましょう。

○令和2年7月17日現在の登録内容で作成しています。○農薬の使用記録簿をつけるよう努めましょう。

写真提供：HP 埼玉の農作物病害虫写真集より